

「主体的・対話的で深い学び」を意図した授業デザインの実践



このリーフレットの内容を参考に「主体的・対話的で深い学び」を意図した『授業デザイン』を具体化させましょう。「毎回の授業で全ての学びが実現されるということではない」ことに留意して、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、「思考する場面」「対話する場面」「学習を見通して振り返る場面」などについて、意図をもって設定することが大切です。

単元を1つ選んで、以下の手順で授業をデザインしてみましょう！

ステップ1：単元の全体像を捉える

- ① 目標設定：身に付けさせたい資質・能力（単元のゴール）を明確にする。
- ② 評価規準設定：資質・能力が身に付いたかを評価するための規準を設定する。
- ③ 課題設定：学ぶ必然性のある学習課題を決定する。
- ④ 単元の導入：単元のはじめに子どもたちとゴールを共有し、見通しのもてる導入を工夫する。

ステップ2：単元の全体像に紐付けて授業の展開を構想する

- ⑤ 授業デザイン：単元のゴールに向かって学びをつないでいく授業を構想する。
 - 単元のどこで、どのような資質・能力を身に付けるか確認しながらゴールに向かう学習活動を設定する。
 - ⇒知識及び技能を習得する学習活動
 - ⇒習得した知識及び技能を活用し、思考する学習活動
 - ⇒深い理解を伴う知識及び技能を活用し、思考力・判断力・表現力等を高める学習活動
 - ゴールに向かう途中で必要に応じて軌道修正する「指導に生かす評価」を行う。（形成的評価）
 - 身に付けさせたい資質・能力に応じた「具体的な振り返り」の場を設定する。
（※上記全ての学習活動を毎時間必ず設定する必要はない。）
 - 単元の終わりで達成状況を把握し、「記録に残す評価」を行う。（総括的評価）



子どもたちが自ら学ぶためには、子どもたち自身が「学びの全体像」を見渡せていることが必要だということですね。その上で、子どもたちが各教科等において「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という学びの姿を具体的に描いて、創意工夫を重ねる授業をデザインすることが大切です。「引率スタイル」と「オリエンテーリングスタイル」という視点をうまく組み合わせ、子どもたちの学びが充実したものとなる授業づくりに取り組んでいきましょう。

☆参考資料

京都府教育委員会
学習改善支援プラン

国立教育政策研究所
授業アイデア例（小学校）

国立教育政策研究所
授業アイデア例（中学校）

国立教育政策研究所
「指導と評価の一体化」のための
学習評価に関する参考資料

